

「道徳教育論」の実践的課題 ～三年間のまとめと検討～

池田裕子・平間信雄

●要約

稚内北星学園大学方式による『道徳教育論』は、ユニークな取り組みである。

学生が学校現場に出向き、学校現場の授業を参観し、その能力を開発・養成するところにねらいがある。学生による道徳授業の実施が保障され、自作の道徳教材（物語教材）を作成し、チームで道徳授業を実体験できるように教育計画がつけられている。

このことを可能にしたのは、学生の学ぶ意欲、隣接中学校の全面的協力、そして担当者のチーム指導体制にある。

本稿は三年間に亘って積み上げられた道徳教育論の教育計画とその展開をまとめたものである。

●キーワード

自作の道徳教材

道徳授業学習指導案

学生による道徳授業

学校現場との連携

道徳教育論のチーム指導体制

●章節構成

はじめに

1．稚内北星学園大学方式「道德教育論」の誕生から三年目

二人の講師と応援団による授業構成

- (1)「学校現場との連携」が見えるシラバス
- (2) 潮見が丘中学校の全面協力
- (3) 二人の講師のコンビネーション

2．授業を通した学生の成長

- (1) 学校現場における「道德の時間」の現状と課題
- (2) 自作の道德資料づくりは道德教育の活性化を促す
- (3)「研究授業」で使用する資料の最終決定過程

3．学生による「道德研究授業」の基本

- (1) 研究授業の役割分担にかかる留意点
- (2) 学習指導案「練り上げ」の指導
- (3) 創りあげた学習指導案
- (4) 授業の実際
- (5)「潮中生の評価」・「学校長の評価」・「学生の評価」のそれぞれの違いと関連性

4．地域と連携した「道德教育論」の今後の課題

まとめ

はじめに

平成20年に改訂された新しい学習指導要領は、平成25年度をもって全ての学校段階で実施される。この学習指導要領は、道德の時間を「要」として、学校の教育活動全体を通じて道德教育を行うことに加えて、「道德教育推進教師」を中心に全教師が協力して道德教育を展開することを明確化した⁽¹⁾。このことは、道德教育がこれまで以上に重視されたことを意味しているだけではなく、それを扱う教師の道德的な力量の向上を不断に求めていく方向性の現れでもある。

こうした動向を受ける形で、平成21年度から稚内北星学園大学が取り組んできた教職課程科目「道德教育論」の特徴は、学生自ら道德の教材（物語資料）を作成し、それを題材にした学習指導案をつくり、学校現場に出かけて生徒たちを相手に授業を行うところにある。資料を作成するという高いレベルの課題を学生に与え、それを達成させることで即戦力となり得る力量を身につけさせる意図であった。

平成21年度は、地域連携を模索した結果、稚内市の現役教員等をゲストティーチャーとしてお招きし、さらには稚内西中学校の教員たちとの協力体制の下で、本学の学生による「道德の研究授業」が初めて誕生した。その実践は、「地域連携で創る『道德教育論』」として本学研究紀要に掲載した⁽²⁾。

平成22年度は、隣接する潮見が丘中学校（以下、潮中）の全面的な協力を得る形で「道德の研究授業」を実施することができた。その内容は、「実践力を育成する道德教育授業の展開～地域連携で創る『道德教育論』2」として本学研究紀要に掲載した⁽³⁾。

平成23年度は、これまでの実践を経て、授業「道德教育論」の枠組みが定まった年度であった。特に、チームで作成した道德資料の分析と発問内容に磨きをかけたことで、学生自身の学習意欲が高ま

り、潮中1年1組の生徒たちに対して行った研究授業では、道徳的实践力の育成に際して手応えのある授業ができた。

こうした経過を踏まえ、本稿ではこのことがなぜ可能だったのか、今年度以降の「道德教育論」の授業の課題は何か、について掘り下げてみたい。

1. 稚内北星学園大学方式「道德教育論」の誕生から三年目

二人の講師と応援団による授業構成

これまでの二年間に亘る「道德教育論」の最大の特徴は、中学校との連携授業にある。ここでは、連携授業における効用という観点から、本学の授業を構成する上で重視している諸要因について論じたい。

(1)「学校現場との連携が見える」シラバス

「道德教育論」のシラバスは、担当者の池田のリードで作成する。一年の実践を振り返り、毎年度シラバスを改善して三年目を迎えることができた。連携二年目となる「道德研究授業」の協力校(潮中)に関する連携のコーディネイト役は平間が担当した。

シラバスを作成するためには、学校現場への授業趣旨の説明と相互理解、連携先学校の現状の把握が必要である。それに加えて、協力依頼を年度当初にできるだけ早く行うことも大切である。例えば、研究授業の実施日、実施時間、実施学級等の確定など、具体的なスケジュールも年度当初に確定しておく必要がある。これは、大学と中学校との年間日程を照らし合わせての調整となり、同中学校の教頭に力を発揮していただいた。

また、担当者である池田と平間の指導構想についても細かな意見交換が必要となる。こうした研究・検討を経て、「学校現場との連携が見える」道德教育論のシラバスが誕生する。受講する学生たちにとっては、現場に実際に赴く緊張・不安と期待が交錯するシラバスである。

【資料】平成23年度「道德教育論」シラバス

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 日本における道德教育の歴史
- 第3回 どのような資料で何を考えさせるか
- 第4回 資料作成のポイント
- 第5回 学生による資料案の提示(演習)
- 第6回 資料の作成・提出
- 第7回 資料の決定・役割分担(ゲスト:潮見が丘中学校校長)
- 第8回 道德の授業参観(潮見が丘中学校)
- 第9回 授業参観を踏まえた学習指導案作成のポイント
- 第10回 資料の検討・学習指導案の作成
- 第11回 学習指導案の作成
- 第12回 学習指導案の発表と検討会

- 第13回 公開模擬授業
- 第14回 最終的な確認
- 第15回 研究授業の実施と協議（潮見が丘中学校）
- 第16回 研究授業の評価と指導計画の改善（レポート提出）

(2)潮見が丘中学校の全面協力

潮見が丘中学校は、本学に隣接する小中連携から小中一貫を構想する学校である⁽⁴⁾。同中学校と本学は、学生ボランティアの派遣事業を始めとするさまざまな地域連携事業を通じた交流実績を積み重ねている。この関係を「道德教育論」の授業連携においても生かして具体化することが求められる。それは、「共同研究の模索」という形でこれまでの連携事業をさらに一歩進展させた関係を構築することにつながる。

そのためには、本学の「道德教育論の授業を地域に開く」ことがまずは重要である。そこで、道德の授業改善にかかる観点を明確にして、その課題の達成に力を尽くしていただけるような適切な人物の派遣協力を依頼したところ、潮見が丘中学校からは、道德教育推進教師の役割を發揮できる教員を推薦していただいた。また、同中学校の校長である白田美智雄氏は、学生が作成した道德資料の全てに目を通し、それらを本学の授業で丁寧に講評して下さった。道德の研究授業では、これら資料の中から1つを選定して使用するのだが、その選定理由を含めて学生に話していただいた。

加えて、学生が指導案を作成する前の段階で、同中学校の道德の授業を実際に参観させていただくこともできた。研究授業の実施に先立ち、こうした幾つかの重要なプロセスを経ることで、深まりをもった研究授業への流れができていくのである。

(3)二人の講師のコンビネーション

「道德教育論」の授業を二人で担当者するTT方式はユニークな取り組みといえる。特に地域連携を重視した実践的な「道德教育論」の授業を展開するには、池田と平間のコンビネーションのあり方が決定的に重要である。

概して学校現場では「指導の温度差」が問題になることがある。しかしながら、当授業においては、話し合いの時間を多く持ち、コミュニケーションがよくとれていたため、こうした不安はほとんどなかった。このコンビネーションは、シラバスを共通の基盤とした役割發揮と相互の気配りから生まれる。それが学生の変容を引き出す力につながっている。三年間で培われた二人の役割は下表に集約される。

【資料】平成23年度「道德教育論」の役割分担表

役 割 内 容	池田	平間
1．授業の目的・運営方針		
2．年間指導計画・シラバスの作成		
3．指導時数の調整		
4．学生の実態分析		
5．毎授業の事前打ち合わせ		

6. 授業課題に対する指導・調整		
7. 潮中への研究授業実施日程の事前打ち合わせ		
8. 潮中学校長への正式訪問・道徳教育懇談		
9. 潮中へのゲストティーチャーの要請		
10. 潮中の道徳授業参観依頼		
11. 研究授業案内文書の作成		
12. 学生による学校長訪問・職員室訪問		
13. 学生による研究授業学級挨拶		
14. 研究授業参観者（来賓）名簿の作成		
15. 成績評価		

（ は主担当 は副担当 ）

2. 授業を通じた学生の成長

ここからは、実践的な力量の獲得を目指す道徳教育授業の今日的な意義について述べることにする。

(1) 学校現場における「道徳の時間」の現状と課題

学校現場における「道徳の時間」は、大きな課題を抱えて推移してきた。この授業でも、初回ガイダンスの際、受講生たちに自らの受けた「道徳の時間」について振り返ってもらったところ、「説教の時間」や「テレビを観る時間」、あるいは「席替えの時間」と言った者もいた。何をしたのか「覚えていない」という学生も少なくなかった。

文部（科学）省は、戦後の道徳教育の在り方について、その不十分とされる点を繰り返し指摘してきたが、受講生から毎年聞かされる「道徳の時間」の記憶は、各学校で工夫を凝らした考えさせる授業を展開しているとは言い難い状況があったことを示している。学校行事との「抱き合わせ」や学級指導との「抱き合わせ」などはその典型と言っていだろう。

例えば平成10年6月30日に中央教育審議会が出した答申「新しい時代を拓く心を育てるために次世代を育てる心を失う危機」では、「道徳の時間」について、「取組に学校差や教員による個人差が大きい」としながらも、まず「大きな問題点」として、実際の平均授業時数が標準年間授業時数である35時間程度に達していない（小学校33時間、中学校29時間）ことを指摘した。そのうえで、授業の内容については、「子どもの心に響かない形式化した指導、単に徳目を教え込むにとどまるような指導も少なくない」こと、そして、それが「学年が進むにつれて、また、小学校から中学校へと進むにつれて強まっている」ことを問題視している。

こうした状況は、現在どのようになっているのか。文部科学省が平成24年の5～6月に実施した「道徳教育実施状況調査結果の概要」⁽⁵⁾によれば、「平成23年度の道徳の時間の学校全体での授業時数の総合計及び平均授業時数」は、小学校では35.7時間、中学校では35.1時間となっており、授業時数35時間程度は確保されていることがわかる。ちなみに、平成20年の10月～11月に実施した「道徳教育推進状況調査結果」^(19年度実績)では、小学校36.2時間、中学校35.0時間であった。

どのような教材を使用したのか（複数回答可）、という点については、「心のノート」^(小学校90.6%、中学校84.9%)が最も多い。次いで多いのは、「民間の教材会社で開発・刊行した読み物資料」^(小学校86.3%、中学校81.3%)である。自作（学校作成を含む）の読み物資料も使用されている（小学校34.4%、中学校56.3%）。中学

校での割合が比較的高いのは、学級経営との関連で、既存の資料に適切なものが少ないのかも知れない。

平成20年10月～11月実施の調査では、「心のノート」(小学校99.3%、中学校95.8%)が多く、次いで多いのは民間の教材会社で開発・刊行された読み物資料であった。平成20年実施調査では、自作の読み物資料は、小学校27.4%、中学校39.2%である。平成24年度調査における中学校の読み物資料の割合は高くなっている。

データを見る限り、近年の文部科学省による道德教育充実の方向性が学校に少しずつ浸透しつつあるということは言えるのではないか。しかしながら、これらの結果が学校現場の実態を全て映し出しているかということについてはわからない。

学校のなかには、道德教育の充実については重要なことだと認識しつつも、忙しさからこの問題に関して十分な手立てを講じることができず、「これではいけない」という焦りを抱えているところも多々ある。

こうした状況から抜け出し、道德教育をさらに効果的に実施しようとする試みについては、学校現場からも大きな期待が寄せられている。また、学生自身が作成した道德資料で学習指導案を創り、学校現場の教室を借りて中学生に授業をする体験学習はこの上なく新鮮であり、学生を「やる気」にさせる。

こうした取り組みは、教科について高い専門性を有する教員の養成というだけではなく「道德の授業」の基本型をマスターした教員の養成という点からも大きな今日的意義を有する。

(2)自作の道德資料づくりは道德教育の活性化を促す

「道德教育論」三年目の実践の意義は、学習活動の目標を「道德の時間の授業づくり」に焦点化し、模索してきたところにある。

先に指摘した学校現場における現状を逆手にとって、潮中との連携を強めるなかで「道德教育論」の実践的課題について検討することは多方面からの期待に応える学問研究の課題の一つでもある。

物語資料を自作することは、時には学生の体験を振り返る機会を提供することとなるが、それ以外にも中学生の共感と感動を引き出す場面を設定し、登場人物のキャラクターを描き、道德授業の展開を意識し、登場人物の変容という形で理想の姿を加えていくという思考過程が求められる高度な取り組みである。

今年度の研究授業に採用した自作の資料「私にできること」は、起承転結がはっきりした四段落構成である。最初に生徒たちに問題意識を持たせ、次に同質性を描き、続けて異質性を考えさせ、最後に覚醒場面を考えさせるという道德資料である(【資料】参照)。

それを可能にした要因としては、①指導計画が適切であったこと、②資料づくりの演習内容を検討する時間の確保ができたこと、③当初は戸惑いを見せていた学生同士が協力することにより学習意欲が日に日に向上したこと、④潮中の全面的支援が得られたことがあげられる。この4点は、本学の取り組みだけに限らず、道德教育それ自体の活性化を促す重要な観点でもある。

【資料】学生の作成した道徳資料

私にできること

渋谷 祐磨

その子が転校してきた日は、クラスがとても賑やかでした。

その子は自己紹介で、「私は体が弱いので、激しい運動はできません」とみんなに言っていました。

私は、「気遣う人もいるだろうし、気にしなくていいや」と思っていました。

ある日、学校が終わった帰り道、その子が一人で前を歩いているのを見つけました。

私は最初、別に気にも留めていなかったのですが、少ししてからその子の異変に気づきました。その子は他の人の半分ぐらいのスピードで歩いていたのです。

私はその子に声をかけようと思いましたが、何を話したらいいのかわからなかったので、声をかけずにそのまま家に帰りました。

その日の夜は胸の中がモヤモヤしました。

次の日、私はどうしても気になったので、その子に「昨日学校帰り見かけたんだけど、いつも歩くのあんなペースなの？」と聞きました。

するとその子は、「みんなと同じように歩くと疲れちゃうから、いつもあんな感じだよ」と言っていました。

私が「一緒に帰る人はいないの？」と聞くと、その子は「みんなに迷惑かけちゃうから、一緒に帰れないんだよね」と言っていました。

私はそのとき、「この子は転校してから今まで、みんなの倍の時間をかけて、ずっと一人で登下校していたんだ」と思いました。

私は、その子に対して何かできることはないだろうかと考えました。

そこで思いついたのが、「その子と一緒に帰る」ということでした。

私は勇気を振り絞って、「今日から一緒に帰ってもいい？」と聞きました。

その子は、「歩くの遅いから迷惑にならない？」と言ってきたので、「帰る方向は同じだし、ペースを合わせるから大丈夫だよ」と私は言いました。

それから私は、その子と一緒に帰るようになりました。

ある日の帰り道、「実は一人で帰るのがずっと寂しかったんだ。でも今は楽しく話しながら一緒に帰ってくれる友達ができた、本当にありがとう」とその子は言いました。

私はその言葉を聞いたとき、胸の中がとても熱くなり、その子の顔をまともに見ることができませんでした。

(3)「研究授業」で使用する資料の最終決定過程

「道德教育論」を受講する学生は、精魂込めて自作の道德資料を完成させている。

その中で道德の研究授業に採用するのは、一篇のみである。

誰の、どの作品を道德の研究授業に採用するのか。それは誰が判断するのか、どんな基準なのか、それが問題となる。一步間違えると学生を失望させてしまう恐れもある。

本学の「道德教育論」では、その基準を、①学習指導要領のねらい、②地域の要請、③子どもの実態、の三つの点から定め、その最終判断については、研究授業を行う潮見が丘中学校校長（白田美智雄氏）に委任する。

言うなれば潮中の学校長は「道德教育論応援団長」＝「道德教育論ゲストティーチャー」＝「道德授業資料選定委員長」である。

潮中校長は、学生の作品全ての検討内容を講義で説明し、講義終了時には、研究授業に採用する資料一篇を選定してくださる。「本校の学級の生徒の実態から見て、この資料をこのように使うならば、子どもの変容が期待される」ということを丁寧に説明される。研究授業に採用された資料の判断基準は、「優秀か否か」のランク付けではなく、「子どもの実態に即した」有用性と有益性にある。つまり、学級経営の在り方と密接に繋がっているのである。学生の理解納得もこうした観点が明確になる中で深まっていく。

三年目の「道德教育論」の実践は、学校現場と大学の授業の効果的な連携システムと内容を創造した。今後も学校現場と連携する際の重要な教訓として押さえたい。

3. 学生による「道德研究授業」の基本

学生自らが資料を作成し、その学習指導案を作成するという試みは、大学の授業で取り入れることが可能であるが、その指導案をもとに中学生に対して研究授業を行うとなると、そこにはさまざまな場面を想定した調整や細やかな配慮が必要となる。その配慮は学生の主体性を損ねるものであってはならない。

ここでは、その具体的な取り組みについて述べることにする。

(1)研究授業の役割分担にかかる留意点

学生による授業は、すべての学生がその能力を発揮できるように配慮することが大切である。

担当者の池田と平間は、こうした観点から今年度の受講生6人の活躍を想定し、授業の役割内容を提示した。そのうえで、学生の自主性を育成し、自薦・他薦によって分担が明確になるように指導した。そのために必要な時間も確保し、シラバスも弾力的に修正した。

学生自身の話し合いが保障されることで、納得し合う領域も拡大し「チーム授業」の基盤が強固になり、学生の自覚も高まる。

学生の授業の役割は以下の通りである。

指導案作成者 若松翔：指導案の原案の作成と提示

メイン授業者 田中 ゆきよし 介：提示された指導案原案を練り上げ、授業を展開

資料朗読者	阿部莉奈：子どもが集中する道德資料の朗読
板書担当者	小野壮一：板書構想・授業中の板書もさることながら、指導案練り上げの最終段階でイニシャチヴを発揮し指導案の完成に貢献
机間指導者	渋田祐磨・若松翔・佐藤健太郎：授業中の個別支援（渋田は資料作成者でもある）
渉外担当者	佐藤健太郎：学級訪問及び職員室訪問、学校長への挨拶、案内状・礼状・アンケートの作成

(2)学習指導案「練り上げ」の指導

研究授業実施にむけての公開模擬授業では、本学の教員たちが協力してくれた。ここでは指導案の「練り上げ」を通じての課題発見が目的となる。本学の教員たちは、模擬授業に参加し生徒になりきる努力をしながらも本番に向けての改善課題を次々と指摘してくれる。学生にとっても担当者である池田・平間にとっても指摘を受けた課題や内容を改善する力量が求められる。

チーム力の育成は、「吸い上げないで、練り上げよう」が基本である。学生の主体性を育てる視点がなければ教える側の発想で「吸い上げてしまう」からだ。こうした手立てを保障することで真剣さが生まれ、チーム力は向上する。

「練り上げ」の良さを体験した学生は、自ら「練り上げ」を求め合うようになる。「練り上げ」作業は学生個々の意識を変え「もっと話し合いたい」「もっと詳しく調べたい」「もっと検討したい」という意欲の向上につながる。

ある時、「今まで自主的に話し合っていました。まだ話し合いたいのです。池田先生、次の「道德教育論」の時間も私たちに話し合わせてください」と迫ってくる学生の真剣さに出遭った。担当者の池田と平間は感動を覚えた。

(3)創りあげた学習指導案

学生の創りあげた学習指導案は、努力の結晶として結実した。

以下そのまま紹介する。

学習指導案

授業者 田中 介
佐藤健太郎
阿部 莉奈
小野 壮一
渋田 祐磨
若松 翔

1. 題 材 名 「私にできること」
2. 資料について

第1部・第2部・第3部分ける

この資料は最初に配布する

3. 対象学年

中学1年生

4. 道徳の内容

主として他の人とのかかわりに関すること

(1) 温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し思いやりの心を持つ。

(2) 多くの人々の善意や支えにより、日々の生活や現在の自分があることに感謝し、それに応える。

5. 本時の展開

ねらい

他の人との関わりを考え、思いやりの心に基づいた生き方をしていこうとする心情を育てる

6. 役割

授業者：田中 介

板書：小野 壮一

資料を読む：阿部 莉奈

補助：渋谷 祐磨

補助：佐藤健太郎

補助：若松 翔

7. 指導過程

	学習内容・活動	教師の支援	指導上の留意点
導入 10分	<p>全体の始業の挨拶 授業者以外の自己紹介と役割説明 授業者（田中）自己紹介 授業者の思いやりについてのエピソード</p> <p>全体構成の説明（授業者） ・今回の授業のテーマ 「私にできること」 ・使用資料の説明 登場人物－私・その子 物語紹介－ ・今回の授業で考えてもらいたいこと 「人のために行動するとは、どのようなことでしょうか」</p>	<p>各役割の位置に移動する。 机間指導担当の場所を確認する。 板書係は全体構成の概略を黒板に書いておく。</p>	
展開 30分	<p>資料の第1部を読む（阿部） 授業者の口頭発問 「モヤモヤとは何を表しているのか」</p>	<p>資料のモヤモヤで表される「自分のやりきれない気持ち」や「行動を起こ</p>	<p>～ねらい～ モヤモヤという抽象的な言葉に共通理解を図</p>

ま と め		したかったが起こせなかった」という後悔だという結論を出す。	る。
	<div> <p>発問 1 (2～3分)</p> <p>過去にあった、手をさしのべたかったがさしのべられなかった経験を書いてください。</p> </div>		<p>～ねらい～</p> <p>モヤモヤのイメージを全員で共有し、生徒の体験からモヤモヤを引き出し主人公の抱えたモヤモヤを体感してもらう。</p>
	<p>ワークシートに記入する 発表</p> <p>第2部を読む(阿部) 主人公が行ったことについての確認</p>	<p>机間指導者は生徒へのアドバイス等を行う。</p> <p>なぜ声をかけたのかと発問を続け、モヤモヤしていた自分のためなどの意見が出てくるように発問をする。</p>	
	<div> <p>発問 2 (1～2分)</p> <p>発問1のエピソードでみなさんが、何か行動できたはずのことはありますか？</p> </div>		<p>～ねらい～</p> <p>声をかけた理由を考え、他の人のために行ったことでも自分のためになっていたりすることを理解する。</p>
	<p>ワークシートに記入する 発表</p> <p>第3部を読む</p> <p>「その子はありがとうという時に、『本当に』がついているのは、その子がどのように感じているからなのか？」</p>	<p>なぜそのような行動をとるのかを聞く。机間指導者は生徒へのアドバイスを行う。</p> <p>その子の喜び具合をいろいろと発表してもらう。</p>	<p>～ねらい～</p> <p>過去にあったモヤモヤの解決策を考えそれらも自分のためだと理解する。</p>
	<div> <p>発問 3 (1～2分)</p> <p>もしあなたが発問2で答えた行動をしてもらったら、どのように思いますか？</p> </div>		<p>～ねらい～</p> <p>主人公が考えた一緒に歩くというのは誰にでもできる些細なことだが人はすごく喜んでくれるということを理解してもらう。</p>
	<p>ワークシートに記入する 発表</p> <p>授業者のまとめ</p>	<p>そのように思った理由を聞く。</p> <p>机間指導者は生徒へのアドバイス等を行う。 Q1. Q2での解答を確認する。</p>	<p>～ねらい～</p> <p>相手のためにしたことがどのような気持ちになるのかを相手の立場になって考える。</p>

10分	〈終了のチャイム〉		<p>～まとめ～</p> <p>繊細なことでも人は喜んでくれる。</p> <p>人のために行動するというのは自分のためにもなるので皆さんも自分でできることを考え、これから生活していきましょう。</p>
-----	-----------	--	--

(4)授業の実際

2月3日、いよいよ研究授業である。この日のために学生たちは話し合いを重ね、指導案を幾度か修正してきた。万全なはずである。しかし、授業は実際に実施してみなければ何が起こるかわからない。潮見が丘中学校では、担任以外の教員も参観に来てくださった。稚内市の教育関係者の方々にも招待状を送付したため、多くの参観者の見守るなか、14時35分から授業は始まった。

滑り出しは順調であった。各学生の自己紹介の後、授業者の田中が「思いやり」について自分の経験を語った。生徒たちは真剣に聞き入っている。その間、他の学生たちは予め決めておいたポジションに移動した。そこで授業者は、この授業のテーマである、「人のために行動するとは、どのようなことでしょうか、今日はこのことを皆で考えてみましょう」と語りかけた。導入の動機付けはうまくいった。次はいよいよ展開である。

朗読系の阿部が紹介され、中央に進む。緊張しながらも、ゆっくりかみしめるように資料を読んだ。資料は一度に全て読んでしまうのではなく、時間配分を考えたいうで発問に合わせて三部に分けた。一部を読んで発問するということを三回繰り返した。生徒の集中を高めるためである。

この指導案の特徴は、生徒たちの実際の体験と資料の登場人物の体験とがパラレルに展開するところにある。資料をモチーフにしながら、実際は、生徒自身が自らの過去の体験と向き合うという構成になっているのである。この方法については、授業における資料の位置付けが相対化されることから、生徒が資料への集中を保つことができるのか（つまり、自分の経験を考えることだけに集中して資料の存在意義が弱まるのではないか）という点と、資料と自分自身の体験をうまく対照することができず、対応できない生徒が出る可能性があるという二点の「難しさ」が想定された。その「難しさ」に対して学生が適切に支援できるのかという点で担当者二名には不安があった。しかし、表面的ではなく、「生徒たちがじっくりと考える授業にしたい」という学生たちの強い要望から、挑戦してみることにした。

「過去にあった手をさしのべたかったが、差しのべられなかった経験を書いてください」という問いに対して、生徒たちは真剣に考えてくれた。考える時間は3分ほどであり、その間、他の学生は滞っている生徒に話しかけたり、答えを共有しようと試みた。担当者の不安は的中し、立ち往生する生徒が何名か出て来た。そのフォローはやはり難しく、学生たちは必死で生徒たちと向き合った。

その結果、何人かの生徒たちから答えが返ってきた。それらを発表してもらい、板書して整理した。出て来た答えのほとんどは、生徒たちが過去の自分と向き合って出した適切なものであった。研究授

業を行う前に授業者が生徒たちに挨拶を済ませていたこともあり、生徒たちはとてもよく協力してくれた。

一人の男子生徒が、発問1「過去にあった、手をさしのべたかったがさしのべられなかった経験」の有無について以下のように答えた。

「小さな子どもが川で遊んでいた。危ないと思ったけれども、止めなかった」

次の発問は、「発問1のエピソードでみなさんが、何か行動できたはずのことはありますか?」というものである。その男子生徒はこう答えた。

「川で遊ぶのを止めさせる」

そして最後の発問で、それは起こった。「もしあなたが発問2で答えた行動をしてもらったら、どのように思いますか?」

この発問は、前の発問とは逆の立場に立ったものである。さまざまな視点や立場を経験させ、人の気持ちをくみ取ることのできる人になってもらいたいという学生の意図から設定された。そこで、男子生徒は、その時川で遊んでいた小さな子どもの気持ちになってこう答えた。

「何で楽しく遊んでいるのに邪魔するんだよ」

その子のために、よかれと思ってしたことが、感謝されずに迷惑がられた。何度も学生同士で話し合い、「練り上げ」を行っただが、最後になって授業者にとっての規定路線、すなわち、「誰かに何かをした結果、その人から感謝される」というストーリーではなく、「誰かに何かをした結果、その人から迷惑がられる」という、想定外の答えが返ってきた。

これは、パターンリズム (paternalism) の問題である。つまり、この場合は子どもよりも年長者であった生徒がとった行動 子どもの利益を守る (危険の回避) ため、子どもの遊んでいたという気持ちを無視して遊びを止めさせる についてどう考えるかという問題である。視点の変更という学生たちの設定があればこそ出てきた観点であった。これが授業の怖さであり面白さでもある。

しかしながら、ただでさえ緊張していた授業者はこの場面に戸惑い、生徒の答えに対して適切な対応を考えあぐねているうちに時間が過ぎた。授業者の焦りは他の学生にも波及し、時間設定に狂いが生じた。まとめの途中で終了のチャイムが鳴り、中途半端な終わり方になってしまった。

学習指導案の完成を率先して行った学生は、このことについて以下のように分析した。

「授業者には、発問1を考えさせる時、次に出てくる発問2、3に対応するように授業内で別の言葉に言い換えるような配慮が必要だった。その配慮が欠けたために、生徒が戸惑い、授業の展開がうまくいかなかった。『手をさしのべたかったが、さしのべられなかった』というのは、この資料の『モヤモヤ』の言い換えに当たる。つまり、『モヤモヤ』が意味するところは、一方で何か他者のために行動したい自分がいるが、他方で他者のために行動できない自分がいたために、『私』が不快な状況にあったことを指す。生徒に対して『モヤモヤ』とこの言い換えがうまく提示できなかったために、資料と発問とが乖離し、生徒の混乱を招いてしまったのではないか」。

彼は、この授業の結論として設定した場に相応しい答えが出てくるように授業者が言葉を尽くして生徒にこの問いの意味を理解させることができなかったことがうまくいかなかった要因ではなかったのかと考えた。そして、「何度かの話し合いで授業の基盤はできており、不測の事態も予測していたはずなので、授業者は落ち着いてさえいれば問題なく対応できたのだが、この時点で緊張が高まり処理に失敗したのだと思う」と結んだ。

しかし、たとえ言葉を尽くして言い換え、説明をしたとしても、思惑と異なる答えは必ずといっていいほど出てくるのである。その場合、どのような対応が適切なのだろうか。

その日の反省会では、パターンリズムについての言及が参観していた本学教員からあった。物事には、たとえ本人にとっては嫌なことでも大局的に見て妥当とされる場合がある。このことは、保護者など大人には理解しやすいことであるが、まだ幼い子ども本人には理解が困難なことが多い。このケースでは、生徒の「危ないと思ったから止めさせる」という判断は、当人からは感謝されなくても妥当性を持つのだし、世の中にはそのようなことは沢山あるということを生徒に伝えれば良かった。

つまり、想定外の答えが出てこないようにするのではなく、むしろ想定外の答えが出てきた時に説明できるように準備しておくことなのである。道徳の学習に哲学や倫理学の素養が必要なのはこの点に関わるからである。

ただし、こうした柔軟で高度な対応は、教育実習に行く前の最初の大舞台で、しかも自分の専門教科ではない授業を行うことによる緊張と対峙している学生たちにとっては、かなりの応用問題である。確かにそこはうまくいかなかったが、その後の討論を経た学生たちにとっては、授業の難しさを知ることによってこれからの成功に導いてくれるこの上ない貴重な「失敗」であった。

学生たちは資料研究の大切さ、授業の怖さと面白さを身をもって知ったのである。

(5)「潮中生の評価」・「学校長の評価」・「学生の評価」のそれぞれの違いと関連性

研究授業は学生たちにとってこの上ない経験だった。授業を全体的に振り返れば、生徒からの活発な発言を引き出し、生徒たちに考えさせた授業となっていた。担任として学級の状態を把握しているわけではない学生たちによる教育実習前の段階における「飛び込み」授業としては、高く評価してよい。

しかし、道徳授業の評価に関しては難しい問題のあることも確かである。道徳の時間では、「どんな子どもも、『善く』生きようとしている。つまり、何が『善い』かを求め探りながら生きている、だからそれに力を貸してやりたい」⁽⁶⁾というスタンスをとるのだとすれば、学校はそれを応援する奥行きを持った場でありたい。

また、道徳の時間では、人の気持ちを推し量るだけではなく、そこには判断の選択と行動という要素が入ってくる。それをどのように評価するのか。さらには、「要」としての「道徳の時間」を使って生徒にどこまでリアルに考えさせることができるのか。資料を読むことによる疑似体験からどこまで掴むことができるのか。「良い子」を演じるだけの授業になりはしないか、これが最も困難を感じるところである。

以下は、授業を受けてくれた中学生たちへのアンケート結果をまとめたものである。

【2月3日の研究授業を終えて】

潮中生の感想

- 「授業はわかりやすかった」 100%
「質問は答えやすかった」 70.8%
「全体を通して何点ですか」 4点 54.2% 5点 37.5%

記述感想では、

- ・心を広くすれば役に立つのだと思った。
- ・困っている人がいたら助けようと思った。
- ・人の役に立つことについてあらためて考え直した。
- ・困っている人がいたら無視しないで、すぐに助けないといけないんだなあと思った
- ・人を助けることはその人のためにもなるし、自分のためになる。

学校長は、以下のコメントを、潮見が丘中学校公式ホームページ上に掲載してくださった(7)。

「中大連携の『道德授業』」

2月3日、稚内北星大学の学生6名が、本校1年生学級において、道德授業を行った。
6名がというのは、資料の集団検討並びに授業を6名のTTで行ったからだ。

授業進行役の学生は大変落ち着いた態度で授業を展開、そのもとで板書をする学生、資料を朗読する学生と、そして、机間巡視でサポートする学生に分かれ、みごとなチームワークだった。

これは、大学で教職をめざす学生たちが、自主教材を作成、指導案の集団検討を経て、授業実践する「道德教育論」の3年目の取り組みであると、指導された池田先生が説明して下さった。

題材は、「私にできること」として、「人との関わりに関すること」の領域。

授業では、「人のために行動するとは、どのようなことか」を考えさせることに主眼がおかれ、教材の資料を読み進めながら、気持ちの「モヤモヤ感」をキーワードに展開。

その都度、生徒個々の生活経験や感情を言語化する活動を行った。

感情や思いを認識に高めていく上で、とても大事な学習活動だ。

思春期に入った中学生にとっては、共に考え、共に追求していける教材資料の提示が欠かせない。

教育現場においては、自主教材の準備となるとなかなか容易なことではないという悩みもある。

自主教材である今回の指導案を、ぜひ参考にさせていただいて、今後の道德授業の充実につなげたいものだ。

学生の感想

- ・正直、時間が足りなかった。資料作成時の一時間のロスが最後まで響いた。来年度は資

料ができてから集まる時間をできるだけつくってほしい。

- ・指導案や自作資料づくりを通じて、道徳とはどういうものが気付いた。資料分析は何回も読んで見えてきた。貴重な経験だった。
- ・三年生全体で話し合えてよかった。「練り上げ」の大切さを学んだ。発問の投げかけと生徒の理解が甘かった。
- ・「尻に火がついた」一週間だった。生徒の意見を板書にどう書くかを考えた。楽しかった。時間と発問が甘かった。
- ・校長先生の話聞いて不十分さがわかった。チャイムと同時に終わったらかっこよかったなあ。流れはスムーズだった。
- ・発問に対して「困ったなあー」と訴えている生徒の目を感じた。

道徳授業の評価は、生徒自身が自己を見つめ、内面的に自覚し、道徳的实践力を身につける動機付けになったかどうか問われる。授業後の生徒の感想は、生徒の7割が授業内容に触れて書かれてあり、その内容から見て9割が授業のねらいを達成していたと考えることができる。また、残りの3割は、「学生へのエール」であった。

これは画期的である。この種の授業では、生徒のほとんどが「学生へのエール」になることが多い。しかし今回は生徒の7割が授業の内容について記述している。それだけ生徒は授業内容に参加していたといえる。

学生たちが成長した分野は、①資料提示、②発問研究、③チーム授業のスキルアップの三つであり、この分野としては目を見張るものがあつた。

不十分さは生徒の実態把握である。しかしこの課題は「飛び込み授業」の限界であり、あらかじめ評価要素からは除外した。

「悔しさをバネにチャレンジしよう」(池田)と激励しあって「道徳教育論」の最後の授業を締めくくった。

4. 地域と連携した「道徳教育論」の今後の課題

生徒の表情が明るくなり、表現力が豊かになる「道徳の時間の授業」は、借り物の資料だけでは創れない。自作資料は子どもたちの実態に即して提示することが可能となるので、親近感を持つことができると同時に関心度も高くなる。教える側にとっても子どもたちに望ましい働きかけができる。

子どもたちの光り輝く良い面と反対に暗く陰湿な面との両方に働きかけ、自分を好きになり、自分の存在価値に目覚め、正義や公正には敏感な子どもを育てるためには、まず教師から子どもの変容を促す自作の資料づくりに挑戦してみる必要がある。

道徳教育の課題は、「教化（indoctrination）としての道徳教育を克服し、自主的な価値選択と行為の能力を養うことを基本に、基本的人権の尊重を中心とする民主主義的な諸価値の子どもによる再発見・再創造の過程を援助すること」であり、「基本的には、家庭におけるしつけをはじめとして、家庭、学校、地域、広くは社会における全教育活動を通して追求」⁽⁸⁾することである。そして、学校現場の実践は、これらを踏まえてなおかつ「生徒の表情が明るくなり、表現力が豊かになる道徳授業の創造」

を目指すことから始めることが必要なのである。

多様な資料の活用は今後研究されるべきであるが、何より、現在学校現場において基本的な方法となっている読み物資料による道德の授業を充実させるためには、既存の道德資料の研究・活用に加えて、教師のチームによる自作資料づくりの実践に取り組む価値は非常に大きい。大学の教職課程における道德教育の授業は、授業の土台である資料の作成とそれを指導案にするためのプロセス、その過程で現れる道德的な問題について学生自身に緊張感をもって検討させ、学生を当事者にさせるような在り方が追求されるべきであり、そのことが、道德教育に課せられた今日的使命を果たすことにつながる。

その意味で三年間に亘る「道德教育論」の実践は、ささやかではあるが「創造」の道を歩んできたといえる。しかし、以下の通り今後の実践課題も山積しているのも事実である。

- ① 学生の「自作資料」の集録・「副読本」の発行
- ② 「自作資料」の多様性の保障と豊かな資料開発（たとえば「聞き取り資料」「チーム資料」「手記資料」など）
- ③ 潮見が丘中学校との連携教育の推進と道德授業の共同研究
- ④ 学生による「道德研究授業」と地域参観・父母参観の可能性の追求
- ⑤ 「道德教育論」の実践の研究発表と教育学会との連携
- ⑥ 「道德教育論」ゲストティーチャーの掘り起こしとコーディネート
- ⑦ 魅力的な「道德教育論」の研究と様々な分野での交流促進

まとめ

学生の変容が大学の顔であり、未来である。

三年間の実践を通じて「学生が変わる喜び」を体験できた。学生は、この経験を自信に変えて教育実習へと向かう。学校現場と連携しての実践は、すばらしいフィールドに恵まれているからこそ実現できる。改めて関係者の皆様に深く感謝したい。

担当者の池田・平間はどうした好条件の中でフルに学生と関わり合い、学び合うことができた。しかしながら、こうした学生を成長させる取り組みは、残念ながら一般化が難しい取り組みでもある。履修者が少人数であることに加えて担当者2名体制をとることができ、さらには稚内市教育委員会や隣接する潮見が丘中学校の全面的な協力を得ることができるというこの上ない条件があればこそその実践であった。平成24年度の履修者は23年度よりも多い。履修者の増加は授業に影響を及ぼす



【写真】研究授業の検討会を終えて（潮見が丘中学校会議室）

が、今後も可能な限り自作資料による研究授業を続けていきたい。

●注

- (1) これについては、文部科学省「道徳教育改訂の要点」『中学校学習指導要領解説 道徳編』2008年、7-10頁を参照のこと。
- (2) 平間信雄「地域連携で創る『道徳教育論』」稚内北星学園大学『稚内北星学園大学紀要』No.10、2010年3月。
- (3) 池田裕子「実践力を育成する道徳教育授業の展開～地域連携で創る『道徳教育論』2」稚内北星学園大学『稚内北星学園大学紀要』No.11、2011年3月。
- (4) 「稚内市がめざす小中一貫教育」とは、「小学校から中学校への円滑な移行と成長や発達段階に応じた適切な教育支援を行うため、地域の願いと実態に根ざした教育課程編制、9年間を見通したカリキュラムの編成、そして教員の乗り入れや児童生徒の学習交流及び生徒指導といった小中の『連携から一貫へ』の歩みをさらに深化させること」である（稚内市教育委員会「平成23年度～稚内市学校教育推進計画」21頁）。
- (5) 文部科学省「道徳教育実施状況調査結果の概要（平成24年度実施）」第1期教育振興基本計画に基づく道徳教育の進捗状況を把握し、次期教育振興基本計画の検討資料とするため、道徳教育の全国的な実施状況を調査したものである。この調査は、「今後の道徳教育の一層の推進に資する」として平成20年度にも実施している。「道徳教育実施状況調査結果の概要（平成20年度実施）」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/doutoku/index.htm（最終確認日：2013年1月14日）。
- (6) 村井実・遠藤克弥編著『共にまなぶ道徳教育 その原理と展開 改訂版』川島書店、1997年、23頁。
- (7) 潮見が丘中学校公式ホームページ「校長室」2012年2月6日（月）の日記No.1854「中大連携の『道徳教育』より」<http://www.siocyu.wakhok.ac.jp/home/>（最終確認日：2013年1月14日）。
- (8) 平原春好・寺崎昌夫編集代表『新版 教育小事典 第3版』学洋書房、2011年、253頁。

●英文タイトル

Practical problems of the theory of moral education 3-year summary and Problems

●英文要約

Moral education class offered by Wakkanai Hokusei Gakuen University is unique. The aim of the class is to raise the teaching ability of our students. In this class our students can not only visit junior high schools and inspect classes, but teach moral education with the teaching materials they made by themselves.

The team teaching system, in which junior high school teachers and we teach together, students' strong will to learn, and the full-scale cooperation of the junior high schools enabled this.

This paper surveys the educational program for the moral education class and its development of this three years.

●キーワード

Teaching materials for moral education class

Teaching plan of moral education class

Moral education class performed by students

Cooperation with junior high schools

The team teaching system in moral education class